

中學
用
香川習字帖
松平書
下

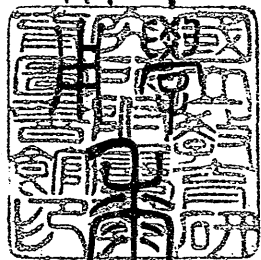
K220.72

29

3

K220.72
29
3

中 校



周

川

習

亭

帖

古陵松柏吼天飈
山寺尋春々寂寥

眉雪老僧時輟帚
落花深處說南朝

絕境讀仙書
寒泉山幾重

蹙然若有人
歸鹿踏秋葉

去年今夜侍清涼
秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此
捧持每日拜餘香

紀律ヲ重ンジ師長ヲ敬ヒ
生徒ノ本分ヲ忘ルベカラズ

運動ヲ務メ飲食ヲ節シ
常に清潔ヲ旨トスベシ

宜上下一心忠實服業
勤儉治產惟信惟義醇

厚成俗去華就實荒怠
相誠自彊不息

平重盛資性忠格沈毅有度量
嘗啓事中宮有蛇至膝下恐其

驚中宮徐捉其首尾以袖蔽之
召源仲綱授之中宮中終無知者

徵集猶豫願
私儀本年徵兵適齡ニシテ徵集セラルルキ
者ニ有之候處目下何府縣立何中學校
在學中ニ付徵集御猶豫被成下度別

紙在學證明書相添へ此段願上候也
住所
年月日
氏名
何聯隊區司令官官氏名殿

拜啓寸楮お呈手紙
にて申上候 甫啓

前略清免 尚文古仁
如 下 与 礼 大 之 信

高書芳翰兮墨披
閱并讀敬復恭誦

春暖春暄花寒の
杉柄桜花乃部等

薄暑新綠梅雨炎威
赫灼殊異秋冷金風

三十九

蒲葑殺微寒
嚴寒無音
炎兒迂生
言堂拙宅

三十一

愈益清福勇健多祥
安素苾芡能壽消光

安意省慮休神依賴
傳之承志榮謝厚禮

先刻過般只今來訪
黃臨余上歸餽照念

親等親切遺憾紹介
面念缺禮希望舊學

本懷之至委細面晤
不敢竭其言之

三十一

家皇不備拜後追伸
親展貴酬平佇直披

三十一

目外一寸中上置以受の
研究會乃儀之付書面議
仕りたとい冒勝手ながら

今夕五時頃より拙宅へ
古櫃架下され度候上
等々不一

新年の清度目出之夜中納言
先以貴方家縁清多祥吉迎新
被成幸加上下随て榮屋

一同無異加幸仕事留下様吉安
意一可被下出先人々年終其
吉祝詞迄如新に能謹之

鐘將東海水，澗出玉英宮。
儲地三州盡，掃乞八葉金。

雲雲如蒸大林，兼日月避中山峯。
獨立原無競，自為眾嶽宗。

前略上野公園の繪畫展覧會も
やうやく當査信より評點も附き
よし鑑覽を明日須最もよろしからむ
と友人より通書これあり

三月廿二日

此の支那畫家も此の明畫同様
新なるまじりや古法何かに
月日
松尾鶴雄様
田中早苗

三月廿二日

千尋の滝に臨むに春はさかぬを
おし雨をばくらくとぞあはれ
すむらよまかよふに花あはれ

水成り勉めを急ぐが故に
時をもゆるむ本あはれ首なる
よそかたきり人のあはれ

垣根乃川平魚をよそふ
軒端は山に為るあそぬ
空可へる富わく入るる
もとぬあそぬをあまらる

峰より花乃ま申
岩にそ接川を答の飛け
清きせぬなをあそ源く
らそそあそぬを水あそし

山上憶良

昔まらなる名をし立てて後世に
来りて人よかむと云ふは

磯月
あま磯乃山名よくたけてある月を
つたなまかへる波の光を

22207

明治四十四年十二月十六日印刷

發行所

著作權所有

錢五廿價定各下中上
結字習川香川校學中

東京市神田區
神保町一番地
千葉縣千葉市

書相續者
右相續者
著作權者
發行所
印刷者

三多

三省堂
支書店
田屋支店

香川熊弘藏
龜井忠一
能勢鼎
三
東京市神田區三崎河岸第十二號地
千葉縣千葉市
東京市神田區三崎河岸第十二號地

